

| | | | |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

主 論 文 の 要 旨

論文題目 日本語会話における共感の仕組み
 ー 自慢・悩み・不満・愚痴・自己卑下の諸相ー

氏 名 釜田 友里江

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は日本語会話の「自慢」、「悩み」、「不満」、「愚痴」、「自己卑下」における共感の仕組みを明らかにすることを目的としたものである。語り手が「自慢」、「悩み」、「不満」、「愚痴」、「自己卑下」を語るときに、語り手は聞き手にどのような反応を期待し、聞き手は語り手の期待を汲み取ってどのように反応しているのかに着目する。そのために「語り手の期待と聞き手の反応」という観点から共感発話の連鎖パターンを分析した。これらの会話において、語り手と聞き手にはジレンマが生じることがある。例えば「自慢」を語る場合、語り手は聞き手に褒めてもらいたい、賞賛してもらいたいと考える一方で、傲慢な人だと思われるのではないかなどのジレンマが生じる。これに対し、聞き手は語り手の「自慢」に対して賞賛したいと考える一方で、相手の「自慢」を心地良いものとして聞くことができない場合においても賞賛を示すべきかなどのジレンマが生じる。Heritage (2011 : 160) は「特に語り手が強い感情（喜び、痛み、楽しさ、悲しみ等）を伴う実体験を語る時、語り手は体験の主観的価値判断と意味を聞き手に受け入れてもらい、スタンスを語り手側に引きつけるよう、聞き手を取り込み、会話を進める傾向が強い」と指摘している。つまり、私たちは日常生活において本研究で取り上げる「自慢」、「悩み」、「不満」、「愚痴」、「自己卑下」のような深い感情を経験したことを語る場合に、聞き手に賛同してもらえることを期待している。本研究では、このような語り手も聞き手もそれぞれのジレンマを抱えながら互いに相手に合わせようとする共感の仕組みについて論じる。

第1章では上記で述べた研究の目的を論じ、本研究では「事実報告」と「経験報告」を区別することを述べた。「事実報告」とは「今日の会議は3時です」「了解しました」というような会話で、聞き手は話し手に事実を受信したことを伝えることが期待されるものである。これに対し、「経験報告」は「昨日彼に振られたの」「それは辛いね」のように、事実の伝達に感情の伝達も伴うもので、聞き手には語り手の気持ちを汲み取った反応が期待される。例えば、「自慢」の場合は賞賛し

てほしい、「悩み」の場合は解決策を提示してほしい、「不満」の場合は自らの正当性を認めほしい、「愚痴」の場合は同調してほしい、「自己卑下」の場合は肯定・否定してほしいという語り手の期待がある。同時にこれらの経験談を聞いて、聞き手は語り手がどのような意図を持って語っているのかを汲み取って、それに応えることが求められる。語り手が、賞賛してほしいことをほめかしたり、遠回しに伝えていたりしていても、聞き手は語り手の意図を汲み取り、その期待に応えようとする。本研究では、このような「経験報告」の語りと聞き手の反応に着目する。

第2章ではまず、先行研究における「共感」の定義を概観した。次に「自慢」、「悩み」、「不満」、「愚痴」、「自己卑下」の5つの語りに関する先行研究を概観した。共感の定義は研究者によって様々であるが、「共感」とは相手の心を知るための積極的な働きかけであるとされている。しかし、先行研究では語り手の期待に聞き手がどのように寄り添おうとするかが明確ではなかった。そのため、本研究では、共感の定義を「相手の考えや気持ちを理解して、相手の期待に添おうとする態度」とした。また、「自慢」、「悩み」、「不満」、「愚痴」、「自己卑下」の5つの語りに関する先行研究では、それぞれの語りの特徴が指摘されているが、5つの語りの関連性は示されていない。そこで、本研究では、5つの語りの類似点と相違点について言及し、相互の関連についても分析した。

第3章では本研究の調査の概要を述べた。本研究では4つの大学の学部1年生(日本語母語話者)を調査対象者とした。調査の内容は、2人で15分間自由に会話をしてもらい、会話をICレコーダーで録音した。15分の会話の中から「自慢」、「悩み」、「不満」、「愚痴」、「自己卑下」の5つの語りの部分を抽出した。

第4章では「自慢」、「悩み」、「不満」、「愚痴」、「自己卑下」の5つの語りを語り手Aと聞き手Bの発話連鎖の観点から分析し、共感発話の連鎖パターンの特徴を明らかにした。この5つの語りの共感発話の連鎖パターンの特徴は次の通りである(以下、語り手をA、聞き手をBと呼ぶ)。

まず、「自慢」の語りに対する共感発話の連鎖パターンについての分析結果を示す。本研究では語り手Aが自らのことや自分に関係のあることを他人に誇ることで聞き手Bから賞賛されることを期待している場合を「自慢」と捉える。Aの「自慢」に対してBが賞賛する場合もあれば、Bは賞賛しない場合もある。そのうち、本研究の調査から抽出されたのは、次の3つのパターンである。

- パターン1: Aの「自慢」に対してBが賞賛を示し、Aが更に「自慢」を語る場合。
- パターン2: Aの「自慢」に対してBが賞賛を示し、「自慢」が収束へ向かう場合。
- パターン3: Aの「自慢」に対してBが賞賛を示しているが、語り手の期待するような反応を十分に示しておらず、「自慢」が収束へ向かう場合。

パターン1ではAの「自慢」に対してBが賞賛を示すことでAが自慢し易い機会を作り出している。パターン2はパターン1の後に現れていて、Aの「自慢」に対してBが賞賛を示すことでAの期待にんでいた。パターン1とは逆にパターン3は、Aの「自慢」に対してBが賞賛を示した後、Bによって話題が変えられていた。

次に「悩み」の語りに対する共感発話の連鎖パターンについての分析結果を示す。本研究では A は B から解決策が得られることを期待している場合を「悩み」と捉える。この場合、A の「悩み」に対して B が解決策を提示する場合もあれば、B は解決策を提示しない場合もある。そのうち、本研究の調査から抽出されたのは、次の 2 つのパターンである。

パターン 1 : A の「悩み」に対して B が解決策を提案し、「悩み」が収束していく場合。
 パターン 2 : A の「悩み」に対して B が解決策の提示はせずに、A の心情に賛同することで「悩み」が収束へ向かう場合。

パターン 1 では A の「悩み」に対して B は単に期待された解決策を提案するのではなく、A を励ますかたちで反応し、A も納得している。パターン 2 では A の「悩み」に対して B が A の選択は正しいと認める反応を示し、A も納得している。本研究では、パターン 1 を「提案タイプ」、パターン 2 を「後押しタイプ」と呼ぶことにした。

次に「不満」の語りに対する共感発話の連鎖パターンについての分析結果を述べる。本研究では A の正当性が認められることを B に期待している場合を「不満」と捉える。この場合、A の「不満」に対して B が正当性を認める場合もあれば、A の正当性を B が認めない場合もある。そのうち、本研究の調査から抽出されたのは、次の 2 つのパターンである。

パターン 1 : A の「不満」に対して B が A の正当性を認める反応を示し、「不満」が収束へ向かう場合。
 パターン 2 : A の「不満」に対して B が A の正当性を認めてはいないが、A の心情に理解を示し「不満」が収束へ向かう場合。

パターン 1 では A の「不満」に対して B が正当性を認めると A は納得し、それ以上、「不満」を語ることをしない。パターン 2 では A の「不満」に対して B は正当性を認めることができないが、A の心境に賛同を示したり、A にとってプラスになる評価を行ったりしていた。それにより、A は B の反応を受け入れ、納得する反応を示していた。

次に「愚痴」の語りに対する共感発話の連鎖パターンについての分析結果を述べる。本研究では A が望ましくない事態や立場であることに同調してもらえることを期待している場合を「愚痴」と捉える。この場合、A の「愚痴」に B が同調する場合もあれば、同調しない場合もある。そのうち、本研究の調査から抽出されたのは、次の 3 つのパターンである。

パターン 1 : A の「愚痴」に対して B が同調し、「愚痴」が収束へ向かう場合。
 パターン 2 : A の「愚痴」に対して B が同調し、A が更に「愚痴」を語る場合。
 パターン 3 : A の「愚痴」に対して B が同調し、A が「愚痴」をやり直す場合。

パターン 1 では A の「愚痴」に対して B が同調することで「愚痴」が収束へ向かっているが、パターン 2 では A の「愚痴」に対して B は A が述べた発話を繰り返したり、言い換えたりすることで更に A が「愚痴」を語るきっかけを B が作っている。パターン 3 では A の「愚痴」に対して B が過剰に同調し、A と B の間で認識のズレが生じていた。このような場合に A は「愚痴」をやり直す傾向がみられた。

最後に「自己卑下」の語りに対する共感発話の連鎖パターンについての分析結果を述べる。本研究ではAが自分の能力や経験が劣っていることを伝えることでBに否定・肯定されることを期待している場合を「自己卑下」と捉える。「自己卑下」の場合はAがBに期待する反応として否定・肯定の2つが考えられる。従ってAが「自己卑下」に対して否定してもらうことを期待している際にBが否定する場合もあれば、否定しない場合もある。Aが「自己卑下」に対して肯定してもらうことを期待している際にBが肯定する場合もあれば、肯定しない場合もある。そのうち、本研究の調査から抽出されたのは、次の3つのパターンである。

パターン1：Aの「自己卑下」に対してBが否定をし、「自己卑下」が収束へ向かう場合。

パターン2：Aの「自己卑下」に対してBが肯定し、「自己卑下」が収束に向かう場合。

パターン3：Aの「自己卑下」に対してBが否定し、Aが「自己卑下」をやり直す場合。

パターン1ではBはAの賞賛できる部分を取り出して励ましている。パターン2ではAの能力を否定することを避けて、Aの心情に同調する傾向がみられた。パターン3ではAはBに「自己卑下」が肯定されることを期待しているが、Bは「自己卑下」を否定して、AがBに抵抗を示している。ここでBはAが期待する反応を示したいと考える一方で、Aの能力を否定することを回避して反応を示さなければならないというジレンマがある。以上、第4章では、AとBが互いに相手の出方に合わせながら態度を調整している様子を見た。

次に、第5章では、第4章で明らかになった5つの語りの共感発話の連鎖パターンを「態度のすり合わせ」の観点から分析した。その結果、以下の特徴がみられた。

「自慢」において、パターン1の場合、Aは単に自分のことを誇るのではなく、Bにも同様の良いことが起こり得るような経験として「自慢」を語っており、それに合わせてBもAに興味を示しながらAが更に「自慢」を語るができる機会を作り出していた。一方、パターン3の場合、Aは「自慢」に対するBの反応が鈍い場合においても「自慢」を続けているが、その後、Bは話題を変えている。態度を合わせるができなかった場合、「自慢」を継続することが困難になることが考えられる。

「悩み」において、パターン2の「後押しタイプ」に更に2つの特徴がみられた。1つ目は、既に「悩み」に対する解決の方向性が定まっている場合である。この場合、BはAの選択が正しいという賛同の仕方によって、Aの選択を後押ししていた。2つ目は、「悩み」に対して解決を目指していない場合である。この場合、Aは「悩み」を知ってほしい、共有することに重点を置いているため、Bは「悩み」に対して賛同を示していた。このように、BはAがどのような「悩み」として語っているのかを読み取り、Aの態度に合わせて反応していた。

「不満」において、パターン1では「不満」に対してBが正当性を認めた場合、Aは態度を緩めて「自己卑下」をしていた。一方、Aの正当性を認めることができない場合は、Bは語り手の心情に同調することでAを認めるような振る舞いをしていた。このような方法は正当性を認めることができない場合においてもAの期待を満たすことができる有効な方法である。

「愚痴」において、パターン1では「愚痴」にも「自己卑下」にも聞こえ得るような語りの場合においても、BはAの「自己卑下」ではなく「愚痴」に対して同調していることを表明していた。その要因には、Aの能力やAにとってマイナスの評価に繋がる反応にならないようにするストラテジーが働いていることが考えられる。パターン3では「愚痴」に対してBが過剰に同調した場合に、AとBの間で認識のズレが生じていた。認識のズレを食い止めるためにAは「愚痴」を「自己卑下」にすり替えることで認識のズレに対処する様子がみられた。

「自己卑下」において、パターン1の「自己卑下」を否定する場合、BはAを賞賛するかたちで「自己卑下」を否定していた。またAはBの賞賛を低めながら、「自慢」にならないように賞賛を受け入れていた。パターン3の「自己卑下」に対して肯定されることをAは期待したが、Bは「自己卑下」を否定した場合、Bは「自己卑下」の観点を改めて（再カテゴリー化を行って）否定をしていることがみられた。このような場合に、Aは再度「自己卑下」をやり直しており、その際にBに合わせてBが示した観点から「自己卑下」をしていた。Bも、Aに合わせて否定から肯定に反応を変えていることが観察された。

最後に、第6章では本研究の結論をまとめ、今後の課題を述べた。本研究の分析結果から、AはBに認められたいという欲求があり、BもAを認めたいという欲求があり、互いに調整を行いながら態度をすり合わせていくことで共感が創り上げられている様子が明らかとなった。共感は自分の欲求を満たそうとするだけでなく、相手の欲求も満たそうとする複雑な営みである。複雑な営みでありながらも、人間関係の構築や維持を行う上で欠かすことのできない営みであることを語り手と聞き手の発話連鎖から示すことができた。今後は齟齬が生じた場合における「態度のすり合わせ」について、5つの語りから更に追究していきたい。